

いなかと♡いいなか

農村ボランティアのその先へ。

「農村」から始める、新しい組織のカタチ。





組織課題に沿った、それぞれの “いいなか”

1 地域の現状と課題

県内の農村地域では、人口減少・高齢化により担い手不足が一段と深刻化しています。草刈り、田植え、稲刈り、特産品の収穫など、これまで暮らしと美しい景観を支えてきた日々の地域の農作業。「今年は規模を縮小せざるを得ない」「田畑を守りたいが、人手が足りない」そんな切実な声が、あちこちの地域から聞かれます。

2 「農村のファン」である『農村関係人口』を増やす

こうした農村地域の課題に対し、地域外から農村を応援し、継続的に関わってくれる「農村のファン」の存在が重要となっています。草刈りや田植え、収穫などの地域活動をきっかけに、地域の魅力や人との交流を通して、「農村のファン」となり、繰り返し地域を訪れる人も生まれています。このような農村関係人口は、単なる労働力ではなく、農村を応援し、ともに地域を支える大切な仲間です。

3 団体連携への展望

そして今、この「個人のボランティア」という枠を超え、企業・大学・各種団体が持つ専門性や知見を活かした「組織同士の強固な連携」へと、この取り組みは進化を始めています。農村が抱える担い手不足の解消と、企業が求める人材育成やエンゲージメント向上、大学が求める実践的な学びの場。双方の課題を掛け合わせ、これからの時代にふさわしい新しい組織のカタチ、持続可能な「いいなか」をともにつくっていきませんか。



組織(企業・団体・大学)

- 人材育成・学びの場づくりの課題
- 教室の外での実践的な学び
- 活動を継続する仕組みづくり

＼ マッチング ／

双方にとって意味のある 「いいなか」の 関わり方

組織

実践的な学びの場、
人材育成の機会

農村

作業の担い手、
地域とのつながり



農村地域

- 高齢化による担い手不足
- 草刈り・田植え等の人手不足
- 活動規模の縮小・継続の不安



「ボランティア」の枠を超えた、 いなかにも、いい何か。

農村地域での活動は、単に人手を補うためのものではありません。
企業、NPO法人・各種団体、大学・専門学校等がそれぞれの人材や知見、専門性を持ち寄ることで、
地域課題の解決につながるだけでなく、参加する組織にとっても、人材育成や学び、
活動の広がりにつながります。

ここでは、それぞれの組織が農村地域とどのようにつながることができるのか、
主なパターンをご紹介します。



社員研修の場として活用する

普段の業務とは異なる農村地域の課題に向き合い、社員が自ら考え、地域の方や仲間と協力しながら動く力を育みます。

農村の困りごとを一緒に考える

担い手不足、情報発信、作業の効率化など、地域だけでは対応しきれない課題に対して、企業の人材やノウハウを活かすことができます。



活動拠点・合宿地としての活用

スポーツ団体や文化団体が農村地域を合宿地や活動拠点として活用し、地域行事への参加や住民との交流を重ねることで、継続的な関係づくりにつながります。

多世代交流の場づくり

活動団体が、週末の活動場所や交流拠点として農村地域と関わることで、世代を超えた居場所づくりにつながります。



地域課題に向き合う実践的な学び

学生が地域の方の話を聞きながら、担い手不足や地域資源の活用など、現場で起きている課題に向き合います。

専門分野を活かした地域との取り組み

食、農業、教育、福祉、観光、デザイン、情報発信など、学生の専門分野を活かし、交流イベントや、広報支援などに取り組むことができます。

農村は、 人と組織を育む最高の舞台。

職場を離れた出会いが、地域と企業に新たな活力を生み出す



本宮市
糠沢地区



NTT労働組合
東京総支部

高齢化や人口減少に対して、「このままでは地域が衰退してしまうのではないか」という危機感から、本宮市糠沢（ぬかざわ）地区では、活気ある地域を取り戻すこと、糠沢の魅力を見つめ直すことを目指して、地域の将来を考える有志が「未来会」を結成しました。

そうした中、地方の地域活性化の取り組みを通じて若手社員の育成に力を入れたいNTT労働組合東京総支部の思いが重なり、連携プロジェクトがスタートしました。さらに県内の学生とのつながりも広がったことで「自分たちでもっと何かやってみよう」という前向きな雰囲気も地域に生まれていきました。この取り組みは、企業にとっても、若手社員が農作業や地域住民との交流を通じて、部署を越えた横のつながりを築く貴重な機会となり、社員のエンゲージメント向上や離職防止などの効果にもつながっています。



このプロジェクトをきっかけに、有志が個人的に現地を訪れて田植えを手伝うほどの「地域のファン」も育っています。地域の危機感から始まったこの取り組みは、都市部組織の成長も支えながら、お互いの未来を豊かにし合う持続可能な関係へと発展しています。

voice

本宮市
糠沢地区
(未来会)の声

地域には若い人が少ないので、若手参加者との交流や外部の方から糠沢の魅力を教えてもらえることは、地域の魅力を再発見できる貴重な機会であり、大きな刺激になっています。都市部の人たちになかの良さを知ってもらい、将来的には移住につながれば嬉しいです。

NTT労働組合
東京総支部の声

最初は受け身だった若手職員も、体験後には『楽しかった』と表情が変わります。地域や世代を超えた交流は若手職員にとって貴重な経験となり、イベントがない年にも、自主的に田植えを手伝ってくれたことは、地域との絆が生まれた大きな成果だと感じています。

POINT

この事例で伝えたいポイント

農村での活動は、単なる社会的責任(CSR)としての地域貢献にとどまりません。ビジネスの「正解・不正解」がない非日常の環境だからこそ、企業の持続的成長に直結する大きなメリットをもたらします。



本音で話せる
仲間づくり

部署を超えた
人間関係の構築

〈若手社員育成のメリット〉



しなやかな
組織

変化に対応できる
柔軟な思考の育成



自発性と
エンゲージメント

非日常体験による
会社への愛着

無理のない「役割のシェア」が、 農村と子どもたちの未来を育む。

畑の管理は地域へ、イベント当日の運営は団体へ。得意を活かし合う共創モデル



郡山市 逢瀬町多田野地区



NPO法人 子育て支援コミュニティ プチママン



少子高齢化が進む中、新たな農村関係人口の創出を目指していた多田野地区と、親子で自然に触れる機会を求めていたプチママンが、サツマイモ収穫のボランティアをきっかけに連携することになりました。この連携により、多田野地区はファミリー層を中心とした広範な農村関係人口を効率的に広げること成功。さらに、地区にとって負担となっていたイベント当日の受付や進行などをプチママンが担うことで、地域の運営負担を大幅に軽減する協力体制が整いました。

また、プチママンにとっても、野菜作りの専門知識や日頃の畑の維持管理に頭を悩ませることなく、質の高い自然体験づくりに集中できるというメリットが生まれています。さらに、収穫したサツマイモを一定価格で販売し、その売上を畑の維持管理費に充てることで、地域は持続的に活動できる仕組みを構築しました。

この取り組みをきっかけに参加者は地区のファンとなり、後日、野菜を買い求めに訪れるなど「継続的な繋がり」が生まれています。それぞれの得意分野を生かしたこの取組は、地域活性化と組織課題の解決を同時に叶える、団体連携の理想像です。

voice

郡山市 多田野地区の声

プチママンさんが受付や運営、子どもたちのケアを担ってくれるので、私たちは畑の準備や農作業の説明に集中できています。子どもたちの元気な声は、地域にとって何よりの活力です。こうした活動をこれからも続けていきたいですね。

NPO法人子育て支援 コミュニティ プチママンの声

管理していた畑を手放した経緯がありましたが、多田野地区と連携により畑の管理は地域にお願いし、私たちは当日の進行、子どもたちの見守りに集中できるようになりました。土に触れ、収穫して食べる体験はとても大切だと感じています。



POINT

この事例で伝えたいポイント

農村地域との連携は、団体に新たな負担を増やすものではありません。お互いの得意なことを活かし、協力することで、団体の活動を広げながら、地域にも新しい人の流れをつくることができます。



＜ 無理なく続ける協力体制 ＞

プチママン

- 参加者募集
- チラシ作成
- 当日の受付・進行
- 子ども等のケア

サツマイモ 収穫体験



多田野地区

- 苗植え
- 畑の管理
- 安全面の対策
- 駐車場の確保・農作業の説明

続けるためのポイント

- 1 収穫したサツマイモを一定価格で販売し、畑の維持費に
- 2 他品目の野菜などの販路確保・拡大
- 3 食育の推進

教室では得られない、 「生きる学び」がここにある。



昭和村
小野川地区



学生フィールドワーク・
ボランティア



大学や専門学校では、学生が自ら課題を考え、形にしていける学びが求められていますが、地域の実情や人の思いに触れながら学ぶ機会をつくることは簡単ではありません。

昭和村小野川地区では、これまで学生のフィールドワークやボランティアを受け入れ、学生が地域の暮らしや農作業、集落の課題に触れる機会をつくってきました。この地域の特徴は、学生に何かを一方向的に教えるのではなく、「この地域で何を見たいのか」「何を学び

たいのか」を一緒に考えながら受け入れていることです。

学生たちは、集落で過ごす中で、便利さや効率だけでは測れない暮らしの豊かさに触れながら、地域の方との交流を通じて、地域の役に立てることに喜びを感じています。また、昭和村小野川地区では、学生だけでなく一般のボランティアの受け入れも積極的に行ってます。その地域活動をきっかけに、地域の魅力が伝わり、「小野川地区で米を作りたい」と移住した人もいます。荒れていた田んぼが再び整えられていく様子は、地域の方にとっても大きな希望になっています。



POINT

この事例で伝えたいポイント

農村地域は、学生にとって地域の人との交流や農作業を通じて、学びを深める場所になります。地域にとっても、地域外人材が訪れることで新しい視点や活気が生まれ、移住者や継続的な関わりにつながる可能性が広がります。



＜ 学びと活気を生み出す協力体制 ＞

学生・大学

- 参加者の集約・連絡
- 事前学習・問いの設定
- 当日の農作業・集落活動サポート
- 学生視点での気づき・提案の共有

フィールドワーク・ ボランティア体験



昭和村小野川地区

- 受け入れ態勢・宿舎等の準備
- 農作業や暮らしのレクチャー
- 学生の「学びたいこと」に寄り添う対話
- 安全面の配慮・地域の案内

続けるためのポイント

- 1 「教える」のではなく、共に「考える」関わりで受け身ではない学びを生む
- 2 農作業や暮らしの体験を通じて「また来たい」と思えるファン・農村関係人口を醸成
- 3 外部人材の活力がきっかけとなり、移住者創出や荒廃農地の再生へ結びつく

季節ごとのボランティア

農村の暮らしと環境を守る多様な取り組み

農村には季節ごとのさまざまな活動があり、その一つをボランティアが支えています。

春 SPRING



農業用水路の土砂上げ

大雨時の溢水を防ぎ営農に必要な水量を確保するため、スコップで用水路底に溜まった泥や詰まった雑草を掻き出します。

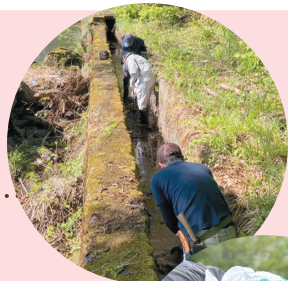


田植え

昔ながらの米作りを継承し豊かな生態系を育む田んぼで手植えの他、苗運びなど、生産者のサポートを行います。

花や農作物の苗植え

地域の景観形成や農地の有効活用のため、花や農作物の苗を植えます。



夏 SUMMER



草刈り

農地の荒廃や害獣の隠れ場所になることを防ぐため、草刈機や手作業で農地周辺や斜面の雑草を刈り払い、良好な環境を保ちます。

電気柵の設置

イノシシやタヌキなどの害獣から農作物を守るため、農地の周囲に一定間隔で支柱を打ち込み、電線を張り巡らせます。

農作物の栽培管理

農作物を元気に育てるため、農作物に合わせた管理作業を行います。



秋 AUTUMN



農作物の収穫

地域で育てた野菜などの収穫作業を行います。

稲刈り

鎌を使って稲刈りや天日干しなどを行います。



冬 WINTER



来年に向けた環境整備（竹切りなど）

放置竹林の拡大を防ぎ、農地や周辺の環境を守るため、侵入した竹をノコギリで伐採し、枝を払って環境整備します。



※活動時期や内容は地域や農作物によって異なります。

ふくしまの農村から広がる、 心と心がつながる未来。

いま、多くの農村地域では、人口減少や担い手不足という大きな課題に直面しています。こうした中、持続可能なむらづくりを進めるため、注目されているのが「農村関係人口」です。

「農村関係人口」とは、移住でも観光でもない、特定の農村地域と継続的に関わり続ける人々のことです。

日々の忙しさから少し離れ、福島農村に足を運ぶ。豊かな自然のなかで土に触れ、地域のひとと語り合う。そんな経験から生まれるのは、立場や世代を超えた「心と心のつながり」です。

このつながりは、地域を訪れる人にとっては明日への活力となり、地域にとっても、外から来る人たちの笑顔や一生懸命な姿は、喜びや「生きがい」へとつながっていきます。

単なるお手伝いを超えて、お互いの人生を豊かにする新しい絆が、今、福島県内各地で広がり始めています。

「いなか、いい何か。」を見つけに、まずは一度、福島農村へ来てみませんか。

そこで生まれるあたたかい出会いが、気づけば、ずっと大切にしたい「もうひとつの故郷」になっていくはずです。

〈交流人口と定住人口の間のグラデーションとしての『農村関係人口』〉

「観光」でも「移住」でもない。地域との関わり方はさまざまです。



お問い合わせ先

お問い合わせ先 福島県 農林水産部 農村整備総室 農村振興課 電話／024-521-7415

令和8年度 「いなかといいなか」むらのボランティア・マッチング支援業務